保育計画成果報告書

法人名等	社会福祉法人神戸ＹＭＣＡ福祉会
施設名	幼保連携型認定こども園西宮つとがわＹＭＣＡ保育園
報告者（役職）	谷川　尚（ 園長 ）
住所・連絡先	兵庫県西宮市津門川２－１４
	☎　　０７９８－２６－１０１６ E-mail　hoiku@kobeymca.org

〇タイトル（保育計画）

縦にも横にも広がる育ちの場、みんなの園庭

〇主な助成備品

築山設置工事、枕木クライミング設置

１．保育計画策定の目的

当保育園に通ってくる子どもの園や家庭での育ちを見ている中で、特に毎日の登園降園の様子や休み中の子どもの過ごし方を聞いていくと、ほとんどの家庭が歩いたり身体を使ったりの遊びの経験を行う機会が少ないことを感じました。

そうした状況を鑑みて、保育園で日中の活動での散歩、また保育室内でのサーキット運動などを取り入れましたが、結果大きなけがの発生件数が減ったり、また室内でのお話などじっとして過ごす活動でも落ち着きが出ているとの報告が上がったり、子どもへ何らかの成果を生んでいるように感じました。幼児での成果を受けて、乳児も毎日必ず園庭や散歩など外で過ごす時間を取り入れていますが、特に園庭で過ごす時間の長い乳児については、平らなグランド、砂場だけでは発達や個々の興味に応じた活動が広がらず、また幼児の園庭での遊びについても運動量だけでなく、集団でのかかわりに変化を与えるような遊びの環境として物足らなく感じています。

今日の発達学によれば、乳児期の運動経験がその後の幼児期、学童期の運動能力だけでなく、座位を保つなどの姿勢や集中にも大きな影響を与えると言われていることもあり、身近であるが十分な広さとは言えない園内の環境でも、子どもが主体的に運動経験や遊びが広がる環境として広がりを生めないかというのが、本計画策定の大きな動機でした。その中で、運動量の確保、運動経験の質を上げることと、遊びの幅や過ごし方など社会力を上げるのが、今回の目的となります。

２．具体的な実施内容

今回の計画では、園庭の４分の１（約５０平米）に大きく土を盛り築山を作り、その横には木登りのような運動ができる遊具を配置することによって、子どもの発達や意欲、好奇心に応じた活動がそれぞれに行えるように変化を生もうとするものです。

築山があると、乳児でも傾斜を登ろうとすることによって、身体や脚の使い方が変わっていき、特に１歳後半から２歳の子どもの運動の幅は広がると考えています。また築山からの風景は乳児でも視座に変化を生み、空間認知を高め、自分とまわり、自分と他者との関係を感じる点でも大きな意味を持つと考えられます。

また幼児にとっては築山に土管を設置することによって、遊びの幅も広がったり、狭い園庭でもパーソナルスペースを持つことができたりと、子どもの心情によっても空間の使い方が広がっていきます。また安全に配慮した形でクライミング遊具を設置することによって、遊びの幅も広がり、運動能力に応じた取り組みも自らでき、様々な活動ができるようになるため体幹に刺激がある活動展開ができます。

タイトルにもあるように、遊びの場としても、縦（築山の高さ、クライミング）にも広がりますが、遊びが広がる中で、子ども同士の関係性も横に広がっていく、そんな環境整備がなし得るのではと期待して本計画を策定しました。

３．その成果と評価

クライミングなどの遊具の導入については、近隣地域や行政とも協議を行いながら計画変更もあり、2018 年春に設置が完了しました。初めて子どもたちに改装後の園庭を開放した際は幼児が築山の勾配を急に感じたせいか、恐る恐る登り、降りるときにはおしりをついて滑って降りようとしました。その園児もおしりから滑るせいでズボンなどが擦り切れ、保護者にお詫びをし続ける日がしばらく続きましたが、1 週間ほど経ち足で踏ん張って降りるようにと声をかけると、次第に勾配にも慣れちゃんと立ったまま降りてくることができるようになりました。子どもたちは何よりわずか１ｍほどの築山ではありますが、その高みの風景を楽しんで、上からいろんな子どもや先生の名前を読んだり、遠くの高架を走る電車を見ては声を上げたりと、街中の保育園であまり遠くを見る習慣もなかったのが、広い視野を楽しむ様子を見ることができました。

→

前の園庭　　改装後の園庭

幼児はまた年長児を中心として「枕木クライミング」にも夢中になって遊ぶようになりました。最初は低い枕木から１本ずつ足をかけて登ろうとする様子が見られ、保育者もちょっとずつ「次に右足を赤いところに動かして」などヒントを出して安全にも配慮しながら恐る恐る行っていました。しかしいつしか保育者は少し遠めに安全確認をしているだけで、慣れている子どもは横の枕木にわたったり、少し自信のない子どもも周りにいる子どもにヒントをもらったり手をかけてもらったりして楽しむ様子が見られるようにしました。身体面として体幹が強くなったり握力なども強くなったことに加え、チャレンジの幅だけでなく、互いの協力する心や頑張ろうとする力も発揮されている様子を見ることができました。

また乳児は当初の狙い通り築山を登ったり降りたりする中で、足腰が鍛えられていると感じる場面が多くなりました。特に下り坂を降りる様子を見ていると日に日に顕著に足が踏ん張れるようになり、外へ散歩するようなときでも以前に比べこけたりするようなことも少なくなり、散歩の距離もこれまでの乳児よりはるかに遠方まで歩けるような体力がついたように感じています。遊び方も、今日は滑って降りよう、ななめから登ってみようと毎日いろんなチャレンジを自分たちで考えて過ごしています。

幼児も築山ができたことによって遊びの幅が広がり、築山の上に登るだけでなく、その下を通る土管も夏には涼しいとっておきの隠れ場になって居場所が増えました。遊んでいるうちにところどころ山が崩れてくることがありましたが、なんとか自分たちで直そうと

しているほどにこの場所を気に入っているようです。築山の上から空を眺め、雲の形を見て動物に例えたり、天気を予想したり、関心の幅も広がっているようです。

これまで保育者も、園庭はフラットなほうが安全面も遊びにとってもいいのではと思っていましたが、実際に築山が設置されることによって、遊びの幅もですが、築山や枕木クライミングがあることで「自らの力を考えて、自らの安全を守る」ことを子どもが学んでいく力があることに気が付くことができました。

４．今後の課題と展望

園庭の改装に伴い、子どもたちの運動体験が豊かになり、結果として体力増強や体幹を強めること、また互いの協力関係などの関係性を豊かにするきっかけが生まれたこと、また遊びが広がったりする中でチャレンジ精神が見られたことなど、子どもの身体や精神面の発達に対し、ポジティブな影響を与えていることが認められました。

今日、乳幼児期の教育保育の大切さ、幼児期のその後の人生に対する影響が大きいことなどが科学的にも立証され、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」として健康な心と体、自立心、協同性、道徳性・規範意識の芽生え、社会生活との関わり、思考力の芽生え、自然との関わり・生命尊重、数量や文字への関心、言葉による伝えあいについて、具体的姿を思い描く中で教育保育のカリキュラムを考えていくように、国からも指針が明示されるようなりました。保育者は子どもの主体性を尊重しつつも意図的によりよい育ちの環境設定を行うよう求められています。まずは築山や枕木クライミングの可能性を保育者が深く考え、子どもにどのような活動や関わり、育ちのきっかけを与えられるかを検討することが必要だと感じています。大きな視点では、今日の子どもの育ちの場、特に家庭環境や遊びの経験を考えて、園庭だけではなく園外の環境も含めた子どもの遊びの場をどのように設定するか、そこに子どもの世界がどのように広がっていくか、そしてその先にどのような育ちの像が思い浮かべることができるか、今の様子を検証しつつこれからの子どもの環境を考えていく必要があると感じています。

以上